



おかじましゅうじ 岡島秀治さん

東京農大農学部長



1950年生まれ。東京農大農学部卒。同大学院農学研究科修了。東洋大学非常勤講師などを経て、87年東京農大農学部農学科助手に迎えられ、講師、助教授から教授に。08年から農学部長。専攻は昆虫学。

昆虫オトシブミは、木の葉で卵を包む。揺籃と呼ばれるその生態を綴ったエッセイ「虫のゆりかご」は、小学校3年生の国語教科書（光村図書）に5年前まで13年間にわたって載った。

カブトムシやクワガタなど各種昆虫について、著述・監修した図鑑類は20点に及ぶ。子どもたちには、あこがれの「昆虫博士」である。

「今の昆虫好きの学生たちも、あの教科書の文章を懐かしく思っているようで、うれしいですね」

大阪生まれ。まだ郊外には緑の自然が残っていたところに育って、カブトムシやチョウを夢中で採取した。それが昆虫研究の道に進む第一歩だった。大阪教育大付属高校に学び、その生物教師の勧めで、東京農大へ。最初の恩師となるその生物教師とは、今や生物科学者として著名な芳賀和夫氏（元筑波大教授）だった。

日本の大学で、昆虫研究は主に農学部の領域として進展してきた。養蚕の伝統、農作物の害虫駆除の要請などが背景にある。

農大の学生として、まず研究対象として直面したのが、農作物に深刻な食害を及ぼすアザミウマだった。「そのころ、芳賀先生は東京教育大（現、筑波大）でアザミウマ研究を手がけていて、それを手伝うように誘われまして」

漢字で「薊馬」。多くは体長2ミリ以下の微小な昆虫だ。奇妙な名称の語源に諸説あるが、昔の



クロサワアミメアザミウマ（体長1.2mm）

昆虫の不思議を探る アザミウマ研究の権威

子どもたちがアザミの花を振って、虫を落として遊んだ。その際、「馬よ出よ」と唱えたからだとも言われる。

芳賀先生の誘いは、運命的だったと言っている。以来、その研究にのめりこむ。昆虫好きの少年そのままの、いかにも敏捷そうな細身の体で、日本だけでなく東南アジア各地でアザミウマを追い続けた。

これまでに世界で5000種以上が確認されているが、うち500種は自らが発見、命名した新種だ。他の研究者が敬意を表して「オカジマ」の名を冠した種もある。今や、アザミウマ研究の世界的な権威である。

70年代と80年代に、外国から侵入したアザミウマが農作物に大被害をもたらした。「それも突然、世界的に被害が広がることがある。その生態は、まだまだわからないことが多い」

昆虫は地球上で4億年も生き抜いてきた。世界には100万種弱の昆虫の存在が知られているが、さらに近年の研究で、その数は1000万種とも5000万種とも言われる。

「昆虫こそ、地球環境に最もうまく適応した動物と言えるでしょう。種類が多いだけ、多様な遺伝子を持っていて、一大遺伝子資源です。その優れた機能を人類がどう応用できるか」

微小な昆虫をのぞく顕微鏡から、はるか人類の将来を見据えている。

（文・秋岡伸彦、写真・神本洋治）